

昭和十一年

(十二)

合掌 南無阿弥陀仏 先日はお便り有難う御座いました。お達者で結構です。あまりお丈夫でないお体故、この頃は風邪にでもやられているのではありませんか。

「趣味や道楽の為の仏法」が、ほんとうに生きることの仏法になり、自慢驕慢の仏法が、角を折る仏法になった事は、誠に嬉しくも有難く尊いことであります。

一月号の闡光録をよくよくお読み下さい。自己を領解することより至難はあり得ない。自己であつて、見えていない部分だけが、自分を困らす種となる。今日、大阪の〇〇府会議長の自殺を見ました。名利心の奴隷となると、その末はあんなことになります。仏の教えをぬきにした一生が如何に無駄であるか、つくづく知らされる事があります。

ほんとうの男一人になりたければ、忠実に仏の教えを聞くことです。聖典の唯一言唯一句でもが、目にとまつたならば、その通りを受け取る事。それをその通り受け取つて、心中を凝視し捨つべきは捨て、取るべきは取り、直すべきは直しするのです。「無我」とは、先ず「教」に対して無我であること。それより一切の無私の生活は生まれて来ることです。

早くより父を失い、母を失つた孤独の子の、ほんとの親や兄弟の見出せたことは、これほど有難いことはありません。おそらく団員同志以上の親類はないでしょう。私にしてからがそれだから。真の念仏のない人は親切だつて大して有難いことはありません。どうか御地の同胞とも、我をとつて、一味一体の大信に徹底的に生かされきつて下さい。

私は念仏によつて貴女ご夫婦にお会いしたことを誠に有難く感謝しています。特にお二人とも念仏求道されることは、真に恵まれた尊いことであります。互いに策励し合つて、真の夫婦道を成就して下さい。念仏中心の夫婦にして、はじめて真の感謝によつて結ばれた仲となりましょう

この上は、行住坐臥、申す方が進みます。

どうか毎日心中の大敵に勝たせないようにご精進下さい。

行巻の講義の時は出て来ますね。待っています。

先日奥さんの御出の時は、大変有難う。不自由な手元大助かりでした。謹んでお礼申し上げます。

奥さんから三十五願についてお聞き下さい。真意は容易にはわからぬことです。近頃の考察ですから。では待っています。

昭和十一年一月二十五日

住岡夜晃

中村狂雨殿

(十三)

合掌 南無阿弥陀仏

如来の御冥見に叶わず、大病遊ばされ候由、平素の我慢つのりて今少しで鬼の手に渡され候ところを毒舌に免じてこの度だけ「娑婆停め」と相成り候事、先ず以つて大慶の至りに奉り存じ候。二十六日より講習に万一ご欠席でも之あらば、いよいよ閻魔法王庁に御出立も近しとおぼえられ候事故に、十分ご養生なされご出席お世話相成り度く。誠にこの世は唯、三世諸仏の出世の儀にも則り、大法宣布、自信教人信、唯一仏道の為の五十年となし度く、病床中も唯お念仏のみにてお暮らしくだされ度く、今は大阪のみ(脇本浄念)随致し居り候も井野へは和尚等も来るべく候。皆様によりしく。合掌

昭和十一年三月十四日 島根県益田にて

狂風

徳泉寺 岡本法幢様

(十四)

合掌 南無阿弥陀仏

今日岡山でお二人のお便りを頂戴致しました。それに御芳志まで一緒に、お礼の申し様も御座いません。

電報を頂いた日から安心しています。何が起きようと安心していました。念仏の子なるが故に、光明団員なるが故に、佐々木校長は赴任したら其の日から何かやる、普通なら一ケ年は様子を見て、それから計画を立てて等呑気なことを言っています。然し今頃何の仕事にだつてそう待つて呉れる処はあり得ない。

けれども四月赴任、六月には着手、矢張り佐々木式です。若し職員達が生きているなら、投げた波紋は大きい筈です。然し時々立ち止まつて、様子をじつと見ることです。「一事徹底」の御方針、結構と存ぜられます。

先ず何よりもお二人の念仏生活です。口よりも手で、体で。人に求めることは徐々に。井野村民の落胆のほど思いやられます。然しいいことです。

三隅の極楽寺の奥さんをたのみます。井野の講習で動いたのですからこれは奥様のお仕事です。

思いきつて恐れずにおやり下さい。又転任させられたら転任する、首になつたら本部に来るのですから。然しかまえて乱をおこす必要はない。海岸部だから反響も大きいでしょう。

今日は岡山へ。今一通、岡山から和歌山市へ転任した山田秀苗氏からもご夫婦づれで便りが来しました。東と西、私はいずれを見ても涙してしまいました。「謹みて先生のお声なき御講演拝聴仕り候。慈悲の御手に介抱され居候。有難き穢身を信じながらも、お懐かしさ、淋しさは格別のもの有りし候」と、お二人よ！ 切るに切られぬ

同胞たちは、遠くに離れながらも、同一念仏に生きぬいています。今日はよい記念日です。

和歌山市湊葵町一二三 山田秀苗 同美佐登にお便り出して下さい。銀行へ出る人です、何時かの『光明』に懺悔録が出ていたでしょう。あの方です、三月末岡山から転任、生まれかわって喜んでいられます。

一切の事

事業をやろう、成績を挙げようとししないで

大悲の心を心として、

如来の愛し子を

お育てする気で

では八月にお会い致しましょう。体を大事になさいよ。和尚は大坂も一緒です。皆元気です。南無阿弥陀仏

昭和十一年四月十四日

狂風

佐々木清一郎 同奥様 御念仏座下

(十五)

合掌 南無阿弥陀仏 お手紙有難う。ご無事でご精進が出来て結構です。その後どうしているやらと心配しておりました。(五行削除)・・・心がしびれて大法が身にしまぬようになったのは恐ろしいものである。何よりも恐るべきである。平気で人が偽られるようになる如来をも殺し得るに至る。人のことではない、誠に我等が気をつけねばならない。

若よ 気をつけて歩め、

何よりもみ仏の 仏祖善智識の御冥見をおそれねばならない。

例会に於いても又も例の「恭敬の心に執持して」を頂いた。

頭を大地につけ合掌して、仏の教戒を受け取らして頂かねばならない。何も悲しむな。何もおそれな。問題は唯内にある。邪見我慢、高き頭より外に恐るべきはない。頭は大地についてあるか、大悲のみ心は頭が下がった者にだけ領解出来る。

釈氏要覽に「四分律言、汝等比丘於我法中更相恭敬仏法可得流布。若比丘不恭敬犯波逸提罪。」(波逸提を墮と訳す、このつみにて地獄に墮する故「墮罪」という。)

以上五月例会の頌書く。

今日、五月十四日大阪にてお手紙受け取り拝見、有難し有難し。いよいよ御無事に、一道に御精進とのこと安心致しました。妙定法師の美しき生涯、若を通して、一人の女性を安養の浄土に送り得たこと、嬉しきことの極みである。何よりも芽出度し芽出度し。これもひとえに、若のここ両三年の求道念仏に対する如来からの賜である。

いよいよ雨も風も覚悟して、一道を歩み切らねばならない。和尚の法座も有難かつたことと拝察する。大阪に来るといつて来ないので皆々淋しがっている。

身の上も淋しいこと、思うがいよいよ、如来と共に生きさせて貰いなさいよ。ほんとうにおわしますのは如来だけだからね。その如来に生きる念仏の人だけだからね。私の二十三才頃は恵まれぬもので、淋しさそのものだった。念仏はないし、狂風でも夜鬼でもなかった頃だし、孤独そのもので、唯闇の中に苦しんでいた。若はそれにくらべたら幸者だ、親のある子だから。

毎日毎日唯如来のみ、真実にてましますことを拝んでいる。唯念仏のみ真実にてましますことを拝んでいる。本月は桂の兄がついて来ている。たゞ一人でいと静かな旅である。

六月に帰つて来るのは無理と思うが、可成帰つて来るように。多分法要もあるまいから。

家計のこともいい葉だと思う。聖人の御用物と思い大切にすることだ。

光明団でない者につめたくせぬように、心の垣をとつて平等に撰するように。

何事も合掌して受け取るように。機会のある時、同胞たちによく言うて下さい。何時も黒沢の同胞のことを思い出している。

昭和十一年五月十四日夜

夜晃

## (十六)

合掌 南無阿弥陀仏……略……

病氣のあるものはつゝんでいるよりはあらわれた方がいいことです。治る為には、病氣は病氣と、はつきりさせられなければならぬ。衆生が如何に、大地の真相と自己の真相にふれまいとし、我慢を貫いてゆこうとするものであるかを、はつきりで見せられました。真実に手をつくことの如何に困難であるかをも、知らされて余りありません。どちらが早くみ心に帰つて下さるか、止まつて五体投地した方が勝ちであります。どうか、お二人とも大悲の中に手を握り合つて下さるように、貴女も亦念じて下さい。

今も「仏説無量寿経」ということを、十一時頃講義して帰つてるところです。夜食の支度の間に書いています。「無量寿とは如来の名号である」名号とは如来召喚の勅命である。皆、みんな私をよんで下さる文字、莊嚴の全てはよんで下さる。それが名号であります。名号とは喚んでいて下さる生きた文字です。生命です。このよんで下さる如来のみ声が衆生にとどけば念仏です。念仏とはよんでいて下さるみ声の聞こえたことでもあります。私が呼んでいることの聞こえた人は「先生―先生―先んせ―い」と呼びます。(岡山の母の手紙にこうあった)、ですから念仏はそのまゝ名号である。

貴女を地上に見出した時、貴女は雨にぬれ、泥にまみれた子猫だった。それがみ名を聞きはじめて十三年、その終始一貫の歩みは、貴女を念仏の行者として、如来は私に賜った。貴女は今、全同胞の崇敬の中におかれてある。一貫相続の偉大なるかな、いよいよみ教えに忠順に、一挙手一投足に気をつけ、本仏の金剛力の貴女の上にあることを、いよいよはつきり念じさせて頂き、歩みきらねばならない。

わけでも△△君の昨今の求道は、誠に有難い極みであります。心一つにして生ききつて下さい。それに上こそ嬉しきは私にはない。

何に別れ得ても、念仏の同胞とは別れ得ない私である。同胞の成長を見るより大きな喜びのない私です。如来はただよびたまうてある。今も和歌山市の山田さんのがきに「合掌 飛び立つ思いのお便り有難く拝受し候。廻向されつつある身の幸を感じ謝致すのみにて候・・・一日千秋の思いに御座候」云々。和歌山に行く、との通知を見てのお便りです。喚ばれる者の心は跳る。

如来は浄土の莊嚴功德を挙げてみ名によつてよびたまうてある。南無阿弥陀仏。外に飾らず、内に虚仮にさめて、合掌して如来の召喚に生きん。み親はよびたまうてある。帰広の途中又お会い致しましょう。

昭和十一年五月十七日

○○○様

夜晃

(十七)

合掌 お便り有難う、ご病氣如何です。大変暑いので弱つてはいませんか。聖会だのに病氣の子はいけない。早くよくなつて帰つてお出下さい。よく御飯をかんで頂きなさい。念仏の中で生きさせてもらい、体は病氣でも、心は歓喜の中にあるようになさいます。多忙多忙、失礼致します。

昭和十一年七月三十日

住岡夜晃

徳山市間之町 藤井秀子様

(十八)

合掌 南無阿弥陀仏

お手紙拝見致しました。体も大分いいとのこと、何より嬉しいことです。いよいよ白兵の接戦になつたとのこと、ご心痛か、ご心配か、二十三才の若者にはいい試練だ。どつちになつても損はない。そこいらあたりで社交術を習い、「いい若さん」になつて、第一線から予備役編入となるか、どうか。いつもいう通り、六十才になつて一寸まるくなればいい。いや、六十になつても正道を歩むがいい。

正道をにらんで歩むことは、さびしい。しかし邪道はなおさらさびしい。黒沢村第一の念仏者がついて来るように歩んだら間違いはない。出るの逃げるのという必要はあるまい。何、あの静かな七曲の入り口の方へでも草庵を結んで、念仏の一道を歩む。そしたら諸菩薩大士が雲集するよ。

道をゆけ、道をゆけ、決して危険はない。

四十二年の生活でよく知らせて頂いた。

群賊の声は群賊の声。仏の声は仏の声。

二十三才のインチキ大徳が、芸者まがいの衣装をつけて、名聞利養を追うて歩みさえすれば、喜び勇んでついて来る連中。物をくれるがよき門徒には御座なく、信心の行者こそ、よき御門徒に御座候。悲しきは一人浜田菊太郎なきことに御座候。

赤手空拳、一人の門徒なく、数人の家族をつれ、五十五円家賃を支払い、マニラ麻をつなぐ手内職の手伝いをせし手は、今この手紙を書いておる。(大正十三年頃のこと)

充実した人生が、他人の精進の余慶から、与えられるとは思わぬこと。

釈尊を憶へ、キリストを思い、そして聖人を憶へ。あまりにぜいたく。一人の念仏者が若と共にあるなら、これにました恵みはない。そして又、分にすぎた幸福。それよりも未だ住職でもないものが、「光善寺住職云々」の用箋の文字が、上の「合掌」の聖語に不釣合いにこそあれ。インチキ、インチキ、おそるべし。この心を拡大すれば、「文学士・・・」なり申し候。親にとつては、全門徒の騒動よりも、このインチキが恐ろしく思われ候。一切は如来の御冥加より外に動かざるが故に。

大願海のうちには 煩惱の波こそなかりけり

弘誓のふねにのりぬれば 大悲の風にまかせたり。

古には、配流の身となりて、これ尚師教の恩致なりと嘆ぜられし人もあり、知る可し。識る可し。

念仏のみ、若の家にて候。

念仏のみ、若の身代にて候。

念仏のみ 若の生命にて候。

他はそらごとにて候。あつてもなくてもよく、いやでもついてまわるものに候。人は真空管の中にはおらず、依正不二、その心に応じたる境界相あらわれ候なり。何より体を大事に、心を安らかに養いたまえ。

昭和十一年十一月十八日

若殿

夜晃